

## 教育による不平等の形成

——改革開放期の中国西北部農村をめぐる——

新保 敦子

### はじめに

中国においては、文革が終結し改革開放政策が採られてから、三十年以上が経過しているが、この間の教育の発展ぶりは著しいものがある。たとえば一九八六年に義務教育法が制定され小中九年間の義務教育が導入されたことで、全国的に小中学校の就学率は一〇〇%近いレベルとなっている（二〇〇八年統計によれば、小学校九九・五%、中学九八・五%）（1）。また改革開放政策の進展に伴う市場経済の潮流の中で、高学歴によつて高収入が保証されるようになったため、大学進学率は二三・三%に上っている（二〇〇八年）。

しかしながら、内陸部、特に農村出身の学生にとつて大学への進学は依然として困難であり、上級学校進学への大きな壁として、中学から高校への進学が立ちはだかっていることが事実として浮かび上がってくる。たとえば中学校から高校への進学率は、二〇〇七年度統計によれば、上海が一〇〇%、全国平均が七九・二%であるのに対して、西北部に位置する甘肅省では、七二・八%に留まっている（2）。

このように農村部の学生にとつて、上級学校進学への大きなハードルとして中学から高校への進学が指摘できる。高校に進学できないため大学へも進学できず、高収入の職に就いて貧困から脱出することもできないのである。

つまり人生のコース分けが、沿海部では高校三年であるのに対して、西北の農村部では、中学三年という早い段階で人生のコース分けがなされる。高校入試がある「十五の春」は、日本において厳しいものがある。しかし、中国においては、高校進学か中卒のまま終わるか、大学に進学して都市戸籍を得られるか、さもなくば農村戸籍のままに留まるか、という一生の運命を左右するものであり、その過酷さは日本の比ではない。

また、中学から高校への進学は、入試の成績によつて決まるが、こうした選別は一見、公平に見えながら、学校環境や家庭環境の影響を、実は色濃く受けているのではなからうか。

そのため本論文では西北部の学生にとつて中学から高校への進学難の実態を明らかにし、進学の阻害要因を考察するこ

とを課題として論じていく。さらに、問題解決のための提言を行っていきたい。

対象としては、国家級の貧困県を抱え全国的に貧困地域として知られる甘肅省及び寧夏回族自治区に焦点を当てるものとする。

本研究で使用するデータは、①甘肅省の夏河県（チベット族居住地域）、通渭県（漢族居住地域）、武山県（漢族居住地域）における質問紙調査（二〇〇六年から二〇〇八年にかけて実施、サンプル数七〇〇）②甘肅省和政県A小学（東郷族、回族、漢族居住地域）及び甘肅省武山県B中学校（漢族居住地域）での質問紙及びインタビュー調査（質問紙調査のサンプル数は小学校七十四、中学校六十八、二〇〇八年）④、③寧夏において学校現場で一九九四年以来ほぼ毎年実施してきたフィールドワーク⑤、及び現地で収集した文献、以上に依拠している。

#### 一 中国における格差問題と教育政策の歩み

社会格差は、階層格差、地域格差、男女格差、都市―農村間格差などがあるが、中国においては、都市―農村間格差の著しさが特色と言えよう。

歴史的に振り返ってみれば、清朝までは地主層も農村部に居住していたが、民国時期以降の都市の発展に伴い地主は農村から都市へ移動し、都市―農村の二元社会となっていた。その結果、都市部に教育条件の良い近代学校が建設されて都市―農村の教育格差が拡大し、農村部では鄉村教育運動

などの民間の社会教育に頼ることになった。

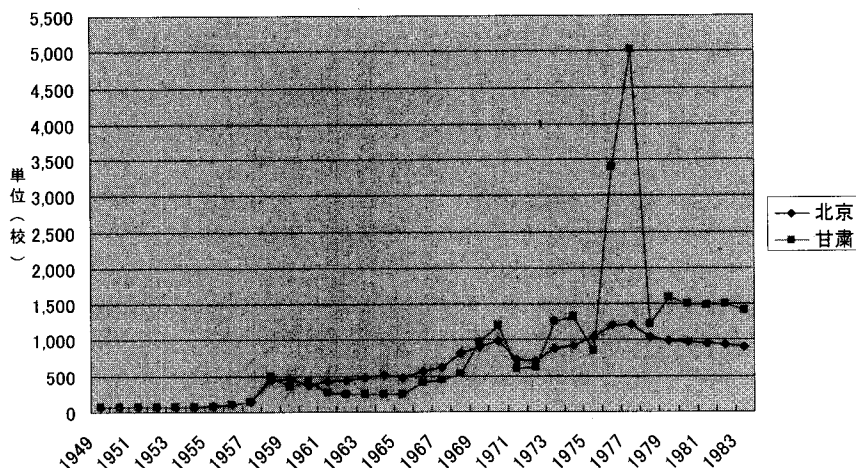
中華人民共和国建国後においては、重工業重視、都市重視の発展戦略が採られた。一九五六年に「國務院關於防止農村人口盲目外流的指示」が出され農村から都市への流入を禁止するとともに、一九五八年には「中華人民共和国戸口登記条例」が制定され、都市戸籍と農村戸籍との区別が明確化された。これは自然災害に伴う農村から都市への人口移動を防止するための施策であつた。

教育政策としては、この時期、農村部に小学校が普及し始めた。その一方で都市部には重点学校が置かれ、教育資源を集中的に投入してエリート教育が実施されるようになった。

文革中においては、こうした都市―農村間の格差は正が目指され、重点学校が廃止された。従来、中等教育段階において、普通中学と職業中学・農業中学が置かれ、二元的な教育システムが採られてきたが、職業中学・農業中学を普通中学へと改変し、一元的な中等教育制度が採られることになった。また、これまで中学が少なかった農村、内陸部において中学校が増加し、たとえば甘肅において文革末期にかけて普通中学校（高校を含む）が急増した（図1）⑥。

文革が終結し改革開放期に入ると、大胆な教育改革が進められることになる。中国における近代学校教育の導入は、清末の科挙制度の廃止（一九〇五年）に遡ることができ、それから約八十年の時を経て、義務教育法（一九八六年）が制定され、法に基づく学校教育制度の普及が目指されたのは画期的であり、注目すべきであろう。

図1 北京と甘肅における普通中学校数の変遷



また、教育体制改革に関する決定（一九八五年）が出されたことで、基礎教育の権限を各地域に委ね、各地の実情に応じた柔軟な施策が実施されるようになる。そのため教育予算、教育目標、カリキュラム、教科書、卒業後の配属に関わる地方政府の裁量権が拡大することになった。これは、地域間の格差が甚だしい状況に基づいた現実的な方策であった。しかし経済的に豊かな地域とそうではない地域との格差を前提とした先富論の教育政策であり、格差を固定化する危険性も内包していた。

また文革期に拡大した内陸部の中高等教育は、再び縮小へと向かい学校数も減少することになった。

## 二 西北部における就学率の向上と進学実態

### 1 就学率の向上

甘肅省夏河県では、九十年代にはまだ中途退学者が多数に上り、一九九三年統計によれば、夏河の小学生生総数八、六八三人中七八六人が退学していた。しかし退学者は減少傾向にあり、二〇〇五年段階での就学率は九七・二％である（7）。

とりわけ一九八六に制定された義務教育法の改正（二〇〇六年）に伴い、二〇〇六年春の新学期から、西部地区農村の小学校では、教科書代金と雑費が免除され、寄宿舎の費用が補助されることになった（二免一補）。そのため、経済的に困難な家庭の児童も就学が可能になった。二〇〇七年の統計によれば、寧夏の初等教育就学率は九九・六％である（8）。

もともと寧夏の山岳地域では小小学齡兒童の就学率は低く、八十年代末に到つても、回族女兒の就学率は約六〇％と言われていた。小学校を卒業できる者は数少なく、中学を卒業できる者はほとんどいなかった。しかし、近年では農村出身者でありながら、中学卒業後に師範学校へ進学し、教師となる回族女子青年も増えている。

たとえば、Xさんは、一九七八年生まれの女性教師で、小・中学校を経て、師範学校（高校レベル）に進学した（9）。Xさんが師範学校に学んでいた九十五年時点の調査によれば、兄弟は上から、男（大卒）、女（非識字）、男（高卒）、男（中卒）、女（小卒）、本人・女（師範在籍）、男（中学在籍）、男（中学在籍）であった。姉二人はまともな教育を受けられなかったが、Xさんが学齡期を迎える頃になると中国の経済状況が好転して寧夏でも基礎教育が普及し、その結果、彼女は師範学校まで進学できることになった。Xさんは、姉に比べて自分が格段に恵まれていると考えている。

ちなみに、兄弟順位と進学との関係を見ると、一般的に男子優先、長子優先であるが、西部における経済発展及び教育普及に伴い、兄弟順位が下の者の教育レベルが向上している。

## 2 大学への進学要求の高まり

このように九年制の義務教育が実施され、小中学校の就学率が一〇〇％近くになった現在、高校や大学といった上級学校への進学要求が高まっている。

（甘肅省夏河県・通渭県・武山県での社会調査、及び雲南省金平県・南華県での社会調査の結果から具体的に分析しよう）<sup>(10)</sup>。

進学要求の特徴として、第一に各地域、各民族に共通して大学への進学要求が高いことが指摘できる。

調査結果を検討すれば、大学・短大への進学希望は、五県平均で本人七〇・一％、親七八・〇％である。特に親の進学希望は五県ともに本人より高い。

第二に、漢族と少数民族とは漢族の方が大学への進学要求が高い。具体的に見ると、大学への進学希望は、チベット族居住地区である甘肅夏河県では本人三四・二％、親五三・九％、おなじく少数民族地区でありイ族が居住する雲南南華県では本人四二・六％、親五二・二％であるのに対して、漢族の居住地域である甘肅の通渭では、本人八〇・二％、親八八・三％であり、高い比率となっている。特に通渭は、「伝統的に文化が発達し、書道家を輩出してきた」と言われており、大学進学への要望が高いと言える<sup>(11)</sup>。

少数民族の場合、民族によって事情は異なるが、たとえば回族の親には、学校に子どもを入学させることによって、イスラームという宗教や民族の文化から乖離することに対する危惧や学校への否定的な感情が残っている。

第三に、西北（甘肅）と西南（雲南）とでは、西北の方が進学要求は高い。西南は自然環境が豊かで「食いつなぐのは困らない」という意識が強く、また共同体も強固である。それに対して、西北部は自然条件が過酷であり、生き延びる道

を個人として模索せざるを得ないという事情がある。

こうした進学要求の高まりの背景として、学校文化に都市文化の普及による都市文化への憧れの強まりが指摘できる。特に、テレビの普及や、都市に居住した経験を持つ農民工及び農民工子女の増大が、こうした状況に拍車をかけている。

また、身近な存在が大学生となり都市部で就職していること、たとえば隣家から大学生が出て卒業後に上海で大学教員として働き始めた、という事実は、農民の進学意欲を刺激するものである。

こうして、今まで大学入学を当初から諦めていた層が競争に参入することになり、進学競争が全国的に激化していったのである。

### 3 中学から高校進学への壁

このように、全国的に各地域、各民族において、大学までの進学希望がある。しかしながら、甘粛や寧夏など西北部では大学へ進学できる学生は限られている。とりわけ貧困な農村地域では中学から高校への進学には大きな壁がある。

甘粛省に位置し経済的に困難な夏河県の統計では、高校から大学への進学率は、〇四年八五・七%、〇五年八〇・九%であるのに対して、中学から高校への進学率は、〇四年三八・八%、〇五年四一・〇%に留まっている(12)。

また甘粛省武山県での教育当局へのインタビュー調査(〇八年)でも、中学から高校への進学率は約四〇%であり、中学から高校への進学の方が、高校から大学への進学よりも難

しいという(13)。甘粛省平均の高校への進学率は前述のように七二・八%であり、甘粛省の中でも貧困な地域において、後期中等教育段階の進学率はかなり低いことがわかる。

高校は義務教育ではないため、高い学費(約一〇〇〇元以上)を支払う必要がある。また高校生の多くは寄宿生として寄宿舎費用を負担しなければならない上、教科書代金も高額である。そのため、現金収入の少ない農家にとって、子女を高校に進学させるのは、困難が伴う。

しかしながら、経済的事情以外にも様々な要因が阻害要因として働いているように思われる。では農村地域における中学校から高校への進学において、何が問題となっているのか。以下の各章では、(1)施設・設備、(2)教育内容、(3)教師、(4)家庭環境に分けて教育面から生じる進学の阻害要因について具体的に論じていきたい。

また、中学校三年間だけではなく、小学校六年間の教育も都市・農村間の格差は顕著で高校進学における阻害要因として働くため、小学校及び中学校について検討していくものとする。

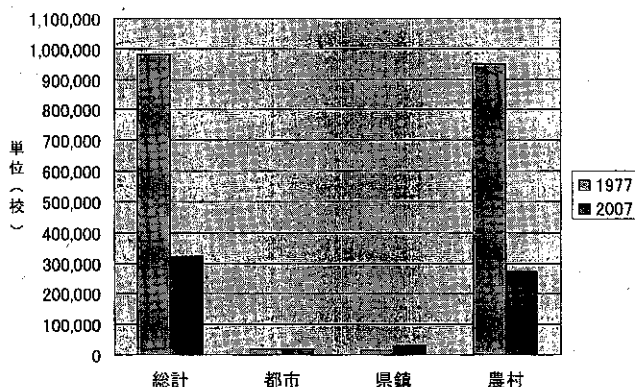
### 三 進学を阻害する要因(1) 施設・設備

#### 1 学校の設置

##### (1) 初等教育機関

農村における小学校の設置は都市部に比べると少なく、農村における小学校の統廃合が急速に進められてきたことは問題である。全国における児童数と学校数との推移を見てみよ

図2 北京と甘肅における普通中学校数の変遷



う。  
小学校に在籍する児童数は、一九七七年の一億四六一七万人に対して、二〇〇七年は一億七八九万人である（七七年を一〇〇とすると、〇七年は七四）。一方、小学校数は、一九七七年の九八万二九一校から二〇〇七年の三二万〇〇六一校へ急減している（七七年を一〇〇とすると、〇七年は三

三）（14）。児童数の減少に比べて小学校の統廃合がいかに急ピッチで進められてきたのかを如実に物語るものである（15）。八十年代においては、例えばモンゴルやチベットなどの遊牧民族地域ではテント学校が設立され、遊牧民族の移動に伴い学校も移動し、低学年の児童に学校教育を届ける試みがなされていた。しかし現在は、統合の方向にある。

また、都市部の小学校は減少しておらず、減少した分のほとんどが農村地域の小学校という点は注意すべきであろう（図2）（16）。

学校の統廃合によって、郷の中に村小学校が無くなり、郷中心小学一校だけになった所もある。確かに農村部に多かった危険校舎が閉鎖され、レベルの低い民営教師が指導することも少なくなった。親の中には、寄宿舎に入った方が勉学の条件がよいので、学校付近の家庭も寄宿舎に児童を住ませたがるという。そうしたメリットがあることは否定できない。

しかし、概して学校の統廃合に伴う不利益が生徒側に転化される構造になっている。たとえば農村部において通学時間が長くなっている。あるいは、小学校低学年から寄宿せざるを得ないが、農民家庭にとっては児童労働の欠損といった問題が生じてしまう。また、少数民族の場合には家族とも分断され漢族の中で育つことで、文化剥奪も危惧される。

## (2) 中等教育機関

初等教育機関と共に高校数が少ないこと、特に農村部の児童・生徒数に比べて、県鎮、農村部の高校数が少ないことは問題である。

西北部は文革時に中等教育が発展した。しかし文革後に中等教育の大規模な調整があり、農村における中等教育機関は中学・高校とともに次々に廃校とされていった。

## 2 教育備品

近年、西北部農村学校の教育条件は、かなり改善が見られるのは事実である。九〇年代前半においては、寧夏農村地域を歩くと、シロアリのために天井が抜けていたり、平屋の校舎が目立った。しかしながら、現在では、二階建て・三階建ての新築校舎が増えており、実験室やP.C.、図書なども整備されるようになってきた。

しかし教育条件の点で西北部農村学校は、上海や北京などの都市部に比べると格差が歴然としている(17)。小学校及び中学校における教育条件(一人あたりの校舎面積、一〇〇名あたりのコンピュータ数、二〇〇七年)を、甘肅と上海とで比較してみよう。上海の小学校は、校舎面積七・六平方メートル、コンピュータ数一六・二台であるのに対して、甘肅は、それぞれ四・四平方メートル、二・六台である。また上海の中学校は校舎面積一一・六平方メートル、コンピュータ数二一・六台である一方、甘肅の中学校では、四・〇平方メートル、四・七台に留まっている。

また、一人あたりの図書の数でも、寧夏・甘肅は、北京・上海よりもかなり条件整備が立ち遅れている。

ちなみに、寧夏と甘肅とを比較すると、寧夏の方がやや恵まれており、寧夏の中学校は、校舎面積五・六平方メートル、

ル、コンピュータ数七・〇台である。実際、筆者が九十年代以降フィールドワークを行ってきた寧夏と甘肅とを比べると、寧夏の方が若干、教育設備の点で恵まれている学校が多いように思われる。甘肅においては、平屋校舎が目立ち、二〇〇八年に訪問した武山県B中学も平屋であった。

これは、寧夏が少数民族地区であり、国内外の多様な支援プロジェクトが入っていること、地理的にみて範囲が狭いため教育行政の面でも管理が行き届いていること等と関係があると思われる。

## 四 進学を阻害する要因(2)―教育内容―

次に教育内容を見ていきたい。教育内容に関わる都市―農村格差を端的に示すのは英語なので、英語教育について論じる。

九十年代末からのカリキュラム改革によって、中国では小三から英語が導入されているが、都市部では小一から開始する所も少なく無い。たとえば寧夏においても銀川市の小学校では、一年生から導入している。

それに対して、寧夏の農村部では、小三から始まらない地域もある。郷中心小学校では比較的に条件が恵まれており開設されている所も増えているが、村小学校のレベルでは、未開設の学校も多い。二〇〇八年の武山県調査でも、僻地にあるC小学校では英語の授業が行われていなかった(18)。

高校受験において外国語(英語)は、語文、数学、物理、化学と並んで主要科目の一つである。しかし①村小学校出

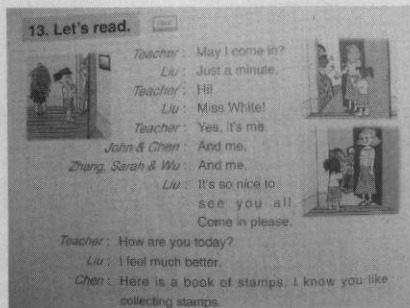


写真1 小6英語（小学3年開始版）

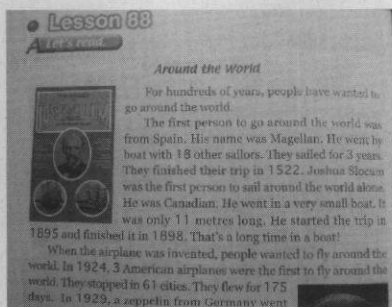


写真2 小6英語（小学1年開始版）

身のため小学校時代に英語をほとんど学ぶことができず、基本的には中学に入ってから初めて学んだ学生と、②郷中心小学、あるいは鎮小学で小学校三年生から英語を学んだ学生と、③県城出身のため小学校一年生から英語を学んだ学生とでは、高校入試段階での英語学習年数がそれぞれ①三年、②六年、③九年となり、かなりの差が開いていることになる。

小学校の教科書においても、英語を小三年から学ぶ場合と、小一年から学ぶ場合とは、六年の段階で修得した内容に差が生じている。写真1は、小三年から英語を学習するバージョンの六年生用テキストであり、写真2は小一年から英語を学習するバージョンの六年生用テキストである（19）。

ちなみに、小一から英語を学ぶバージョンの六年生のテキストにおいては、日本では中三で学ぶ過去分詞の構文も盛り込まれている。

中国では、このようにスタートラインが全く異なる学生が、同一地域ブロックであれば都市部であっても農村部であっても高校受験においては、同じテストで選別されることになる（甘肅省蘭州市 高校入試英語試験）（20）。

さらに大学受験においても英語は主要科目であるが、小学校一年から英語を十二年間学んできた都市出身の学生と、農村出身で英語を中高の六年間しか学んでいない学生とでは、自ずから差が生まれるのは明白である。日々の学習の継続が必要とされる外国語学習において数年間のギャップを埋めるのは、並大抵のことではない。

また、農村部における英語教育の問題は、英語を使用する環境にないことである。たとえば、農村部の学生は漢語の場合であっても、教科書の中に天安門や故宮が出てきた時に、実際に見たことが無いため、都会の学生に比べて理解が困難である。ましてや、日常生活の中で英語を話す外国人や英語の看板に接した経験が無い彼らにとって、英語教育は親しみのある科目とは言えない。

そのため、農村の小中学校では英語嫌いが相対的に多い。前述の甘肅省A小学、B中学での調査によれば、あまり好きでない科目を質

## 蘭州市 高校入試英語試験

二、单项选择题：阅读下列各题，从题后所给的A、B、C、D四个选项中选择一最佳答案。(20小题，每小题1分，共20分)

21. There's \_\_\_\_\_ 800-metre-long road behind \_\_\_\_\_ hospital.  
A. an, an      B. a, a      C. an, the      D. a, the
22. The population of the world \_\_\_\_\_ still \_\_\_\_\_ now.  
A. has; grown      B. is; growing      C. will; grow      D. is; grown
23. — Excuse me!  
— \_\_\_\_\_  
— How can I get to the nearest post office?  
A. Yes?      B. That's OK.      C. What's wrong?      D. Pardon?
24. Why not \_\_\_\_\_ your teacher for help when you can't finish \_\_\_\_\_ it by yourself?  
A. ask, write      B. to ask, writing      C. ask, writing      D. asking, write

問した所、英語二〇・四％、数学八・五％、漢語七・〇％であり、全科目の中で英語を不得意とする生徒が最も多かった。

特にA小学校では英語があまり好きではないという児童が約三割に達している。A小学は東郷族が多い少数民族地区に

あり、小学校就学に伴い母語以外の漢語の学習に加えて、小学校三年生から始まる英語の学習が負担になっていると考えられることができる。グローバル化の伴う学習内容の増加が、少数民族児童に不利に働いていることを示すものであろう。

### 五 進学を阻害する要因(3)——教師

#### 1 専任教師学歴合格率及び生徒対教員比率

専任教師の学歴合格率は地域間の格差が著しく、北京・上海と甘肅・寧夏とを比べると顕著である。たとえば上海の小学校九九・八％に対して甘肅の小学校九九・七％、上海の中学校九九・八％に対して甘肅の中学校九五・一％である。特に、甘肅では小中高ともに農村部での教員の合格率が低い(図3)(21)。

教師対学生比率は上海の小学校一三・九人に対して甘肅の小学校二〇・八人、上海の中学校一二・八人に対して甘肅の中学校一八・七人である(図3)(22)。上海といった都市部の方が、きめ細かい指導が行われていることを示すものである。また日本と中国とを比較すると、日本の小学校の方が一学級あたりの生徒数は少ない(図4)(23)。勉強熱心な児童が多く、クラス規模は日本に比べて大きくても統制は取りやすいものの、中国の農村部の児童は一人一人に目配りした教育を受けることが必ずしもできていないと言える。

図3 教員合格率の地域格差 (%)

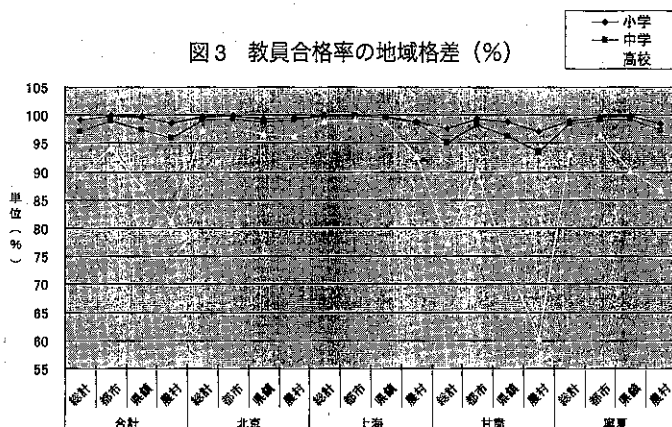
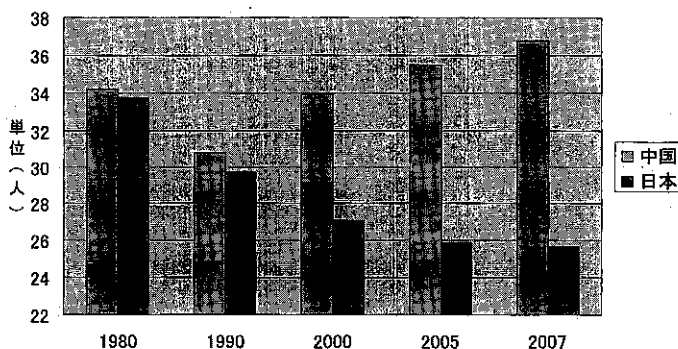


図4 1学級当たり生徒数の日中比較〈小学校〉



## 2 優秀な教員の都市部への移動と残された農村教員

日本においては、教員は公務員であるため、農村部に転勤になっても、職務としてそれに従わなければならないため、都市部と農村部とは教員の資質の格差は無いと言って良い。しかしながら、中国で教師は学校と個別に契約を結ぶシステムが導入されており、優秀な教員は条件の良い都市部へ移動している。都市部への移動が教員の意欲を高める動機付けの手段となっているとも言えるが、その結果、農村部には優秀な教員は残らないことになり、都市部と農村部との教員の資質格差を生んでいるのである。

配属を規定する要因は多様で、学校の教員枠の空き状況や教科にもより、各県ごとに事情は異なる。加えて父親が幹部や官僚の場合、都市部の学校への移動が比較的に早く、父親が農民の場合移動が遅くなりがちである。たとえば、寒

村の農民家庭出身のY先生は、師範学校在学中に父親が逝去した。配属先は出身地域に近い寒村であり、卒業後、七年後にも同じ地域に留まっているが、僻地勤務のため子どもを夫の実家に預けての単身赴任を強いられている。より条件の良い都市部の学校に転勤し大学で継続的に学びたいというY先生は、現状に満足できていない(二〇〇七年寧夏調査)(24)。

### 3 代用教員の多さ

僻地や貧困な地域では、条件が悪く予算も不足しているため、教員の確保が難しい。そのため、代用教員を当てている。特に、甘肅では代用教員比率が高く、二〇〇八年統計によれば、代用教員比率は教師総数の一一・一%である(全国は三・九%)(25)。

また甘肅省武山県でも専任教員三七八七人、代用教員三九一人であり、教員総数に占める代用教員の割合は九・三%である(二〇〇八年)(26)。約一割が代用教員であるが、特に貧困地域になるほど代用教員比率が高い。例えば、武山県温泉郷C小学では、教員六人のうち、専任教員三人、代用教員三人であり、教員の約半数が代用教員で占められている。

ちなみに寧夏では、代用教員比率は五・五%である(二〇〇八年)(27)。また、国家級の貧困県として知られる河南省蘭考県の村小学校であるD小学校での調査においても代用教員はおらず(二〇〇九年調査)(28)、甘肅農村における代用教員の多さは大きな問題と言えよう。

代用教員の場合、職務内容は正規の教員と同じでありなが

ら月給が安く(二〇〇元)、生活が不安定なため不満が高い。病気にかかっても病院にも行けず、落ち着いて教育に当たることができない、と不安を訴える教師も少なくない(二〇〇四年寧夏調査)(29)。

### 4 教師の資質と授業展開

では、甘肅農村部において、教師はどのような授業を行っている、それは都市部の学校といかに異なっているのかを検討したい。

農村小学校の事例を紹介する(二〇〇六年調査)。事例1として、夏河県E小学での授業の参与観察によれば、教室の前の方の座席の学生に目を向け、発問は主にこれらの学生に対して行い、後ろの座席の学生を指名しないことが指摘されている(30)。また中国では、「優秀な子どもは国家の宝」なので優遇するのは当然と考えており、夏河県での生徒へのインタビュー調査においても、教師は成績優秀な学生を優遇し、できない生徒を軽視しているという。農村の小中学校を訪問すると、後部座席に座っている生徒が寝ていても、そのまま起こさないで教師が授業を進めてしまふ、という光景も散見する。

事例2として、夏河県F寄宿制小学での授業の参与観察によれば、授業の中で不必要な作業をさせているという(31)。例えば、漢語の授業において、教師の音読(七分)、全員の音読(十分)、班に分かれての音読(八分)、班から一人選んで全員の前で音読(七分)、全員の音読(三分)というやり

方が採られ、一コマ四十分の授業のうち三十五分が教科書の音読に当てられていた。しかし本文の内容解釈や理解には目が向けられていなかった。

一方、都市部の小学校ではどのような授業が展開されているのであろうか。

事例1として、銀川のG小学を紹介したい(二〇〇七年調査)(32)。筆者が見学したのは、二年生の英語の授業で、九月に新学期開始してから二回目であったが、「I like cat. I like doll. I like bear. I like dog.」という構文を学習していた。教師が自分のPCで作成したパワーを使つて授業は行われており、これは一般的なこと、との説明であった。教師の発問に児童が答える形で授業展開がなされていたが、正解の場合には教師が折り紙でつくった紙細工を児童がもらうことができ、児童も喜び楽しい雰囲気であった。女性教師は次々に学生を当て、四十分授業の中でクラス全員の五十二名が最低一回は当たっていた。

事例2として、上海のH学校(小中一貫制)では、小学一年生の英語の授業において、一切、漢語を使わずに英語だけで授業が展開されていた(二〇〇五年調査)(33)。華東師範大学の教授によると、同小学校はバイリンガル教育をセールスポイントにしているものの、普通レベルの学校とのことであった。

しかし担当の女性教師(上海外国語大学卒業)は生徒をラッシュダムに指名し、いつ自分の順番が来るかわからないという緊張感の中で、子どもたちは授業に集中していた。あまり挙

手しない生徒にも教師が目配りをし、四十人クラスで四十分の授業中に一人の子どもが最低二―三回は当たっていたことが観察された。生徒の意欲を高めつつ、徹底的に身体にたたき込むような英語教育が行われていたのが印象的であった。

ちなみに、日本でも新学習指導要領(平成二三年)において小学五・六年生で週一コマの英語が導入されるが、中国では都市部を中心として、日本よりもはるかに進んだ英語教育が行われている。一般的に英語専科の教員が英語による直接教授法で教え、週五コマの英語の時間を設ける小学校も少なからずあり、高度な教育が展開されているのである。

このように農村部での教育と都市部での教育では教師の資質に差があり、授業のレベルが極端に異なっている。そのことが農村部出身の学生にとって上級学校への進学を困難にしているという事実がある。

中華民国時期を代表する著名な教育学者である陶行知は、中国における教育問題の解決のためには、優秀な農村小学校教師の育成が必要であるとして、一九二〇年代に曉莊師範を南京郊外に設立した。それから約八十年が経過しているが、依然として優秀な農村教師を育てることは大問題である。陶行知の先見の明とともに、中国農村における教師の資質の向上がいかに解決困難な課題であるのかを物語っていると言えよう。

## 六 進学を阻害する要因(4)―家庭環境と成績―

西北部の農村においては高校の数が少ないこともあり、中

学から高校への進学段階で選別され、ふるい落とされる学生が半数以上を占める。つまり成績が上位、もしくは中の上(上位四〇%)に位置していなければ、進学は厳しい。

こうした学業成績に対して、家庭環境はどのような影響を与えるもののだろうか。甘肅省和政県A小学、甘肅省武山県B中学で二〇〇八年に実施した質問紙調査(小学校七四、中学校六八、合計一四二サンプル)をSPSSによって分析した結果をもとに、家庭環境と成績の格差について考察したい(34)。

第一に、家庭の経済状況と学生の成績は相関関係にあり、経済状況が恵まれている学生の中には成績上位者が多いのに対して、経済状況が厳しい学生の中には、成績上位者が必ずしも多くはなく、成績不振者が目立つ。たとえば富裕戸においては、成績上及び中の上が六〇・〇%以上を占めるのに対して、貧困戸では上及び中の上は三三・三%に過ぎない。一方、中の中以下が六六・七%を占めている。

ただし、家庭の経済状況に影響を与える大きな要因と考えられる父親の職業と学生の成績は、明確な相関関係には無い。

第二に、小学校入学前の漢語の到達水準と学校の成績とは相関関係がある。概して入学前に漢語ができる児童は学校での成績も優秀であるのに対して、入学前に漢語ができなかった児童の場合、全員の成績が中の下以下のレベルである。A小学校は東郷族居住地域であるが、学校では彼らの母語である東郷語ではない漢語が教授言語となっていることが影響を

与えている。

このことは、少数民族学生にとって、漢語と母語、学校文化と下位文化との乖離が、学業成績において不利に働き、上級学校への進学が困難になっていることを意味する。そのため、少数民族であっても小学校入学前の早い段階から漢語学習を開始した方が、学校で良い成績を取めることにつながる。しかしながら、早い段階での漢語学習は、母体となる文化からとの乖離を招き、アイデンティティの揺らぎをもたらすことになる。その意味で、少数民族は大きなジレンマを抱えていると言えよう。

第三に、手伝い時間と成績とは負の相関関係にある。手伝い時間が短い方が成績は良い。一日の手伝い時間〇分の場合、成績が上の者は六六・七%を占めるのに対して、手伝い時間三時間以上の場合、成績が上の者は一五・〇%に留まっている。一方、手伝い時間三時間以上では、成績が下の者が一五・〇%に上っている。甘肅の武山県及び和政県では、農民家庭出身者が多いため、手伝い時間は一日に三時間以上という生徒が少なくない。手伝いをせざるを得ない農家出身の学生にとって、長い手伝い時間は学業の阻害要因になっていると思われる。

第四に、家庭において読む本(参考書、新聞・雑誌、科学読物)と成績との相関関係はそれほど明確ではない。これは家庭における文化資本の蓄積が、現状では、それほど顕著ではないためと考えることができるだろう。

## 七 格差克服のための提言

## 1 不平等から不公平感へ

## — 十三億総受験競争社会の中で —

現在、中国では、大学への受験競争に多くが参加するようになり、いわば十三億総受験競争社会が出現している。子どもたちは絶えざる進学競争に駆り立てられ、地方の農村においても、一年生から教室に成績が張り出されている状況である。

また、教師にインタビュースると、クラスの成績が郷の中で何番であった、県の中で何番であった、あるいは、漢語コンクールで一位であった、踊りのコンクールで一位であった、論文が〇〇誌に掲載されたなど、自分の教育成果を述べる。教師自身も、担当しているクラスの成績が、自分の給与や都市部の小学校への転勤に直結するために、必死であり、教師が子どもを競争に駆り立てている。

こうした中で農民は、学歴による貧困の脱出を図りつつある。たとえば河南省蘭考県の貧困家庭におけるインタビュ調査の結果を紹介しよう(二〇〇九年)。現在、貧困家庭は、片親、親の病気、子どもが大学生の家庭に集中している。Z家は農業を営んでいるが、夫は交通事故で健康を害し、妻も病気である(35)。妻は非識字であるが、それでも、三人の子どもを育て、長女は大学法学部を卒業、二番目も大学生、三番目も高校生である。長女は大変に優秀で省都の公務員試験に一番で合格した。

しかしながら、コネが無かったため採用されなかった、という。長女の大学学費のために借金をしたにもかかわらず、まだ就職口も見つかっておらず借金返済の目途が立たない、ということでの不満な様子であった。このように中国においては貧富の格差の広がりだけではなく、格差を認識する層の広がりが見られる。

不平等な現実と、不平等な現実を不平等なものとして認識することは異なるが、現在、不平等な現実を不平等と考える層が増えつつある。こうした不公平感の広がり背景としては、出稼ぎ者の急増、大学入学者の増大、テレビの普及などの社会的な背景があると思われる。

こうして学歴による脱出を図ってきた農民が、中国の格差に目を向けるようになり、不公平感が醸成されつつあると言えよう。

## 2 格差克服に向けて

それでは、西北農村部のコース分けが中学三年の時点ですなされ、教育による不平等が形成されている現実を克服するためには、どのような施策が有効なのだろうか。西北部における教育予算の増額は大前提として必要であるが、本章では、教員の資質向上、多様な後期中等機関の設置という観点から提言を行ってきたい。

## (1) 基礎教育段階での教員の資質向上

まず、農村の基礎教育段階での教師のレベルを向上させる必要がある。基礎教育段階では、とりわけ九十年代後半以

降、新しい校舎が建設され、学校施設が整備されてきた。しかしながら、現在、ソフトの面、とりわけ教師に関わる課題が大きい。たとえば、施設が不十分であつても、教師が優秀であれば、教材や教具は作成できる。何よりも教師、特に小学校低学年担当教師が重要であり、その力量不足は学校嫌いを生む結果に繋がる。

ここでは、中国とイギリスの協力によって甘肅省和政県で行われた中英甘肅基礎教育プロジェクトについて紹介したい(36)。同プロジェクトは、九十九年から開始されており、プロジェクト校である前述の和政県A小学では、特に研修に力を入れている。

研修の特徴として、第一に、県長、教育局、校長、一般教師、女性教師など様々なレベルで行っていることがある。また、第二に、校内研修によって教員が目標設定を行い、毎日、教師自身、あるいは、教員が集まって振り返りを実施している。第三に、参加型によって参加者の自発性を高める形での研修が実施されていることを指摘できる。

その他、OJTで専門家(メンター)の指導を受けたり、評価の積極的導入を図っている。校内研修の重視やメンターによる指導など、世界的に見ても最先端の教員研修の実践が甘肅の農村で展開されているのである。

こうした段階ごとのきめ細かい研修と日常的な研修活動の方式をとることで、教員研修で学んだことが、日常の教育活動の中で生きることになる。たとえばA小学校で授業を見学したが、二つの机を合わせて六角形にして六人一グループで

座り、グループ作業を取り入れながら、活発な算数の授業が展開されていた。

筆者自身は、中国貧困地域に対して教育支援を行うNGO(宋慶齡日本基金会)の寧夏プロジェクト担当者として、一二〇名規模の農村女性教師の夏期研修を行ってきた経験がある(二〇〇二年、二〇〇四年、寧夏銀川)。参加した女性教師の追跡調査を行うと、研修で多くのことを学ぶことができたものの、勤務校に戻った時に、研修の成果が活用できない、と語る教師もいる(二〇〇四年調査)(37)。生徒の自発性を重んじた授業を行おうとすると、詰め込み風に慣れたその他の教員や父母が、「何を遊んでいるのか」と批判するという。教員研修で新しい教授方法を学んでも、学んだ教授法が使用できず、教師が孤立することも少なくないのである。その意味では、中英甘肅基礎教育プロジェクトは、多くの示唆に富んでいると言えよう。

このように小学校レベルで農村の教員の資質が向上できれば、基礎教育段階で農村の児童にもレベルの高い教育が提供でき、これが中学から高校、さらに高校から大学といった上級学校進学への土台になるのではなからうか。

## (2) 多様な後期中等教育機関の設置

次に、多様な後期中等教育機関の設立が求められる。中国では大学進学を重視して、普通高校が重点的に設置されてきた。しかし、大学学生募集数は限られており、そのため後期中等教育段階で多様な教育機関の設立を推進する必要があると思われる。

ここでは普通高校に進学しなかった（成績や経済的要因で進学できなかった）学生のためのセイフティネットの事例として、アラビア語学校を紹介したい。甘肃や寧夏においては、イスラームを信仰する多数の回族が居住し、モスクに併設される形で民営のアラビア語学校が設立されている。学校経営は寄付を中心としており学費は安く、政府の管轄下に置かれる公立学校とは異なる独自の教育機関として運営されている。学生の大部分は中卒であり後期中等教育機関に相当するが、一部、小卒や高卒も個別に含まれる。

アラビア語学校は、主にクルアーンやアラビア語の教育を行っている。たとえば、甘肃省臨夏市の「女校（女子アラビア語学校、寄宿制）」の一週間のカリキュラムによれば、月から土まで一日七コマで合計一週間に四二コマ学ぶ。内訳はアラビア語一〇、クルアーン音読六、クルアーン明文四、聖訓四、信仰四、漢語四、歴史二、活動一、自修四、演習会三である。カリキュラムは、クルアーンの宗教教育とアラビア語の語学教育が中心の構成と言えよう（二〇〇七年調査）（38）。回族の母語は漢語であるが、イスラームへの強い信仰心を持ち、クルアーンが書かれているアラビア語への関心が高いことから、熱心に学習している。アラビア語学校の卒業生の中には、浙江省義烏あるいは広東省広州において、アラビア語の通訳として活躍する者も多い。義烏には世界的に著名な巨大卸売市場があり、多数のアラビア商人が買い付けに押し寄せている。そのためアラビア語通訳の需要があり、アラビア語学校の卒業生が歓迎されている（二〇〇七年調査）（39）。

広州においても、中国と中近東諸国との関係の密接化に伴い、アラビア語の通訳の需要が高い（二〇〇八年調査）（40）。

広州で出会った銀川イスラーム経学院出身のアラビア語通訳者は、「語学は武器である」と語っていた。アラビア語学校は、普通高校に進学できなかった青年にセカンドチャンスを与える教育機関であるが、彼らは通訳として、普通高校への進学者よりも高収入の職業についている。また近年の調査によれば、大卒者、特に少数民族大卒者の就職難から、回族地区ではアラビア語学校に進学する者が増えているという。

それとともに、アラビア語学校では、宗教教育によって、自分たちは後の世代に「生命をつなぐ存在」として生きる目標を与えている。宗教教育は広い意味での道徳教育とも言え、その意味で、アラビア語学校はアラビア語という職業教育と道徳教育を行い、自己肯定感や自尊感情も高めている点は注目されよう。

義烏や広州にはアラビア語学校卒業でアラビア語通訳から会社を興し成功した企業家もいる。彼らの多くは、故郷の家族に仕送りをするとともに、出身地域のモスク、あるいは故郷の道路補修などの公共事業にも寄付をしており、故郷の発展のために貢献しているのである。アラビア語学校は、少数民族がその民族の優越性を生かして地域間、民族間の格差是正に成功したケースと言えよう。

#### まとめ

改革開放政策の進展に伴う市場経済の潮流の中で、高學歷

によつて高収入が保証されるようになったため、大学進学率は二〇〇八年統計によれば二三・一％に上つてゐる。こうした大学進学者の増大を背景として、十三億人が受験競争に参入し、進学競争は全国的に激化してゐる。

しかしながら西北農村の学生にとつて、大学への進学は困難であり、とりわけ、中学から高校への進学には大きな壁が存在している。その阻害要素として、学校施設・設備、教育内容、教師、家庭環境（手伝い時間、経済状況、入学前の漢語レベル）などの要素がある。

中国では都市部と農村部とは教育条件が甚だしく異なつてゐるため、体格が良い者と貧弱な者とが、同じ土俵で勝負するような、そうした違和感があり、受験競争は公平性に欠けてゐるように思われる。

こうした問題を解決するためには、西北部の教育予算の増額と共に、教員研修の充実によつて基礎教育レベルでの教員の資質を向上させることが必要である。中英甘肅基礎教育プロジェクトは教員研修の成果を日常の授業に行かせる方式として示唆に富んでゐる。

さらに、後期中等教育レベルで多様な教育機関を設立し、高校に進学できなかった青年層に多様なチャンスを与えていく必要がある。本論で紹介したアラビア語学校の事例は、少数民族の優越性を生かした実践として注目できるのではなからうか。

謝辞・本研究は日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研

究(A)課題番号一七二五二〇〇三(研究代表者・中兼和津次)の成果の一部である。調査に同行して下さった科研メンバー及び甘肅省社会科学学院の関係者の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

# 注

- (1) 中華人民共和国教育部發展規劃司『中國教育統計年鑑二〇〇八』、人民教育出版社、二〇〇九年、一五頁。
- (2) 寧夏回族自治区教育庁『二〇〇七年度寧夏教育統計手冊』、二〇〇八年、一三七頁。

- (3) 本調査は、日本学術振興会科学研究費補助金・基盤研究(A)「中国農村における貧困発生メカニズムとその対策に関する社会経済的研究」(課題番号一七二五二〇〇三(研究代表者・中兼和津次))の研究の一環として、甘肅省社会科学学院及び雲南省社会科学学院に委託して行われた社会調査である。実施地域・実施時期及びデータ数は、それぞれ甘肅省夏河県二〇〇六年(二〇〇)、甘肅省通渭県二〇〇七年(三〇〇)、甘肅省武山県二〇〇八年(三〇〇)、雲南省金平県二〇〇五年(三三三)、雲南省南華県二〇〇七年(三四三)である。

- (4) 和政県A小学校調査、二〇〇八年九月。武山県B中学調査、二〇〇八年九月。

- (5) 寧夏調査。一九九四年から二〇〇七年にかけて、小中学校を主な対象として約十五回のフィールドワーク

- を実施。拙稿「改革開放政策下での中国ムスリム女性教師―進路選択・生活実態・アイデンティティに焦点を当てて―」『日本社会教育学会紀要』No.46、二〇一〇、四一―五〇頁参照。
- (6) 中華人民共和国教育部計画財務司『中国教育成就一九四九―一九八三』、人民教育出版社、一九八四年、三〇六―三一頁。
- (7) 夏河県統計局『夏河県統計年鑑一九九〇―二〇〇〇年』、二六〇―三六一頁。甘肅省甘南藏族自治州夏河県統計局『夏河県国民経済統計資料二〇〇五年』、二四〇頁。
- (8) 寧夏回族自治区統計局・国家統計局寧夏調査隊編『寧夏統計年鑑二〇〇八』、中国統計出版社、二〇〇八年、三七五頁。
- (9) 女子師範生調査、固原県、一九九五年十一月。
- (10) 前掲注(3)。
- (11) 甘肅省社会科学院の包曉霞氏談、二〇〇九年三月一日。
- (12) 武山県教育局提供〇六年資料。
- (13) 武山県教育局インタビュー調査、二〇〇八年九月。大学進学よりも高校進学が難しいのは、一九九九年以降、アジア経済危機への対応策として内需拡大のため大学募集数を拡大し、大学入学が以前よりも容易になった影響もある(一九九九年の募集数は前年の一・五倍)。
- (14) 中華人民共和国教育部發展規劃司『中国教育統計年鑑二〇〇七』、人民教育出版社、二一三頁。前掲『中国教育成就一九四九―一九八三』、二一―二三頁。
- (15) 学校の統廃合については、南亮進・牧野文夫・羅敏鎮『中国の教育と経済発展』、東洋経済新報社、二〇〇八年、一三九―一四一頁参照。
- (16) 前掲『中国教育統計年鑑二〇〇七』、一五四頁。前掲『中国教育成就一九四九―一九八三』、二二〇頁。
- (17) 前掲『二〇〇七年度寧夏教育統計手冊』、二二―二三頁。
- (18) 甘肅省武山県C小学校調査、二〇〇八年九月。
- (19) 写真1は、小学校三年生から英語を学ぶバージョンの英語教科書である(①課程教材研究所・英語課程教材研究開発中心・Lingo Media 国際集団合編『英語(PEP) Pep Primary English Students' Book』、人民教育出版社、二〇〇四年、七二頁)。写真2は、小学校一年生から英語を学ぶバージョンの英語教科書である(②課程教材研究所英語課程教材研究開発中心・北京市海淀区教師進修学校・国際集団 Lingo Media 合編『英語 Sharing Line Students' Book』、人民教育出版社、二〇〇六年、八〇頁)。
- (20) 蘭州市 二〇〇九年高校入試英語試験(二〇〇九年六月二〇日実施)。http://www.21cnjy.com/H/4/39080/579474.shtml (最終閲覧日、二〇〇九年六月三十日)。
- (21) 前掲『二〇〇七年度寧夏教育統計手冊』、二三―

- 二三九頁。
- (22) 前掲『二〇〇七年度寧夏教育統計手冊』、二三三—二三九頁。
- (23) 文部科学省資料。 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shougai/008/toushin/330301/07.ht...](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/008/toushin/330301/07.ht...) (最終閲覧日、二〇〇九年七月十一日)。
- (24) 二〇〇七年九月調査、固原市原州区。
- (25) 前掲『中国教育統計年鑑二〇〇八』、二〇〇九年、五三九頁。
- (26) 武山県教育局インタビュー調査、二〇〇八年九月。
- (27) 前掲『中国教育統計年鑑二〇〇八』、二〇〇九年、五三九頁。
- (28) 河南省蘭考県小学校調査、二〇〇九年三月。
- (29) 女性教員調査、寧夏銀川、二〇〇四年八月。
- (30) 「夏河県中心小学C個案報告」西北師範大学『学校個案研究報告』、二〇〇七年、二〇四—二二〇頁。
- (31) 「夏河県村小C個案報告」前掲『学校個案研究報告』、一五六—一七〇頁。
- (32) 銀川市G小学調査、二〇〇七年九月。G小学は重点小学校。
- (33) 上海市H小学調査、二〇〇五年三月。
- (34) 甘肅省和政県A小学調査及び甘肅省武山県B中学調査、二〇〇八年九月。
- (35) 河南省蘭考県農民家庭調査、二〇〇九年三月。
- (36) 甘肅省和政県A小学調査、二〇〇八年九月。
- (37) 女性教員調査、寧夏銀川、二〇〇四年八月。
- (38) 女学調査、甘肅省臨夏市、二〇〇七年九月。
- (39) 女学卒業生進路調査、浙江省義烏、二〇〇七年十二月、二〇〇九年十二月。
- (40) 女学卒業生進路調査、広東省広州市、二〇〇八年十二月。松本ますみ『イスラームへの回帰—中国のムスリマたち』、山川出版社、二〇一〇年、一二四頁参照。